



この「みさこ」は、16年ほど前、34歳、39年より坂本龍一氏の「ゴッドファーザー」に参加、文藝系テレビ番組などに出演するなど多岐にわたる活躍を続ける。2014年に結婚し、夫は俳優の宮川俊郎氏。現在は、米軍基地問題に関心を抱く方々と共に、チャリティイベントなどで社会貢献活動に取り組んでいる。

古謝さんは沖繩の海が好きだ。けれど、子どものころに遊んだ地元・水釜の美しい砂浜は消えた。基地建設によって住民の土地が取られ、海を埋め立てて住宅が造られたからだ。一九七二年の「本土並み復帰」も「何が良かったのか、さっぱり分からない」と話す。米軍基地はそれまで以上に押し付けられ、海辺は本土の資本によって乱開発された。沖繩の自然は破壊され続けてきたのだ。

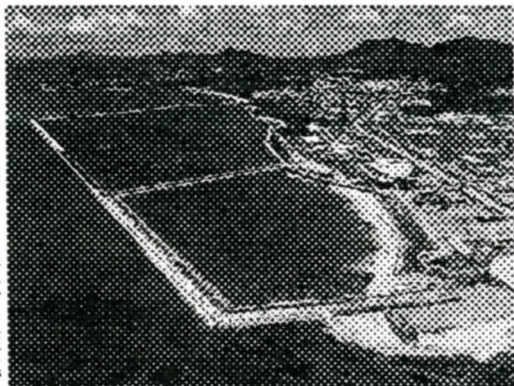
これ以上の自然破壊やめよう

その環境破壊の最たるものが軍事基地だ。基地建設が進められる辺野古の海では、昨年からの護岸工事が進められ、今年七月、六つの護岸がすべてつながった。広い海域が囲い込まれた後は、潮流の止まった護岸の内側で魚介類やサンゴなどは死滅するしかない。

「今、造られているのは巨大な軍港です。私たち沖縄人には見えないけれど、米軍は核だつてなんだから、持ち込めるでしょ。戦後の基地は強制的に取られた土地に出すことになるので、ここに造つてほしいよって」

古謝さんは米軍のヘリパッドが建設された「やんばるの森」の汚染にも心を痛める。そこは原民の「水がめ」だからだ。ヘリの水が汚れた水がそのまま流されている。「米軍は、フェンスの中はアメリカだから何をしてもいいよって言うの

自分たちで土地差し出すことになる



辺野古沿岸部に囲い込みが完了した海域＝8月18日、沖縄県名護市で（小型無人機から）

を。沖繩人を同じ人間として見えないね。日本政府もアメリカがどんなひどいことをしても何も言わない。私たちはどうの国からも攻められる。……辺野古新基地が完成すれば「三井は使えると言われている。軍事植民地のようにな扱いをされている限り、沖繩は顧みられることはないと思う」。

もうひとつ、古謝さんが納得できないのは、県民に札束をさつこうとするような政府のやり方だ。「翁長さんが基地に反対したら補助金をカットしたでしょ。基地の建設に『うん』と言ったお金をあげるなんて

まるで子どもを羊なすけるようですよ。まっとうな政治家が出てきてほしい」

翁長氏の遺志を継ぎ、県民は止まっていたが、国は知事選の後に、土砂の投入を始めようとしている。掘削機にもつれ込む選挙に古謝さんは沖繩の分断を憂う。

「基地をたたくたいという思いはみんな同じはずなのに、ウチナンチュ（沖繩の人）同士が戦わされるなんてね、悔しいですよ」

「一軍神を作ったときの初孫は二十歳になった。『三ー』と呼んでくれる七人の孫たちがいておかし。一孫

たちはこれから長い時間を生きていく。彼らの親の世代には、今度の選挙のことをしつかり考えてほしいの」。古謝さんの願いだ。

「私はただ基地に賛成だ、反対だつて言うのではありません。未来の世代のためにどんな沖繩が残せるのかね、それを考えたいのだからね。よく考えて選挙に行きましようねって」

予定時間を大幅に超えて古謝さんは語り続けた。それは決戦を前にウチナンチュだけでなく、沖繩に過重な基地負担を負わせる政治を憂えきれないヤマトンチュ（本土の人）にも伝えたいかたじけなかった。最後に古謝さんは言った。

「私は沖繩の国者、沖繩に生きて、その古謝美佐子、沖繩を育てたい。あつがえないで、無理だつて、あきらめちゃいけないよって思うの。それだけよ」

ウチナンチュ同士が戦わされるなんて 悔しい

音楽は政治に燃れてはいけません。そんな風潮がある。主張が左でも右でも、政治的なことを歌い、語ることもたかれる。古謝さんも勇気が必要だったよ。本気が必要なのか、ばかげたことだ。ロックバンド「12」のメンバーは、若いころ批判を「激し」スーパースターになった。(裕)